

澤村聡／編著

『アートは地域を変えたか  
越後妻有大地の芸術祭の十三年 2000-2012』

慶應義塾大学出版会（定価2,400円＋税、2014年）

高齢化や過疎に直面した土地で、地域振興のために始められた現代アートのお祭りが、最初は住民たちの反発を引き起こしながらも、ボランティアやアーティストとの交流を通して徐々に根付き、やがて地域に活気をもたらした。「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」を知る多くの人々が漠然と抱いている印象だろう。この魔法のような出来事は、日本の津々浦々で同じ問題を抱える地域が追随するのに十分すぎるほど魅惑的なものだった。だが、2000年の第1回から2012年の第5回まで、手探りで開催を継続させてきた新潟県の十日町地域が歩んだ道のりは、決して平坦なものではない。

本書は、新潟大学の研究者たちがそれぞれの専門知識を生かし、第1回開催までの経緯、各回の運営主体や規模の変遷、経済効果、地域活性化、関わった人々の変化、他の芸術祭との比較といった観点から、客観的な数値や、アンケートや新聞に寄せられたリアルな声に基づいて、13年の歴史を刻んだ芸術祭に迫る内容である。来場者数は回を重ねるごとに増え、消費支出もそれに伴い増加傾向にあるが、各回で報告書のデータ算出法などが異なるため、事業費と経済効果を天秤にかけ、公共事業としての成否を判断することは保留されている。とはいえ、県や主催者の報告から慎重に集められたデータの分析は、芸術祭の実情を知り、今後を考える

ための重要な手がかりとなるだろう。一方で、数値には換算できない効果を知るためのキーワードが、「ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）」である。閉鎖的で同質的な連帯による「結束型」と、開放的で異質なつながりによる「橋渡型」に分類され、芸術祭では外部からボランティアのこへび隊や、アーティスト、来場者が訪れることで「橋渡型」が促進され、さらに「結束型」をも刺激したことが、アンケート調査により示された。第4回と第5回を実際に訪れた私自身も、アブラモヴィッチの「夢の家」を維持する地元の女性たちの真心や、普段アートとは無縁の仕事を営む男性たちが、ボルタンスキーの「No Man's Land」の制作風景を生き生きと語る声に触れたひとりである。

突き詰めて考えると、芸術作品とは、他者との遭遇をもたらすものである。現代アートにおいては、作家が生きているゆえに、その出会いがより一層緊張を孕んだものとなる。首都圏からやって来たこへび隊にせよ、世界各地で活躍するアーティストにせよ、得体の知れないアート作品にせよ、自分たちの平穏な生活空間に突然の闖入者があれば戸惑い、反発するのは当然である。「分からない」現代アートと真摯に向き合い、受け入れることは並大抵のことではない。だがその過程で湧き起こる葛藤や共感が、生きることの肯定につながることを、美術の現場にいる者たちは信じている。本書を読み終えて、どんな形にせよ十日町の人々が変化する原動力となったのが、現代アートであったことの意味を、そして彼らが芸術祭を継続してきたことの意義を、改めて問わずにはおれない。来年の夏には第6回の開催が控えている。

(横山由季子 (国立新美術館アソシエイトフェロー))